

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 民族とその文化における国家政策・民族間関係の影響に関する一事例：広西北部三江 族自治件斗江郷の場合

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚田, 誠之 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00002125">https://doi.org/10.15021/00002125</a>

民族とその文化における国家政策・民族間関係の影響に関する一事例  
——広西北部三江侗族自治県斗江郷の場合

塚田誠之

キーワード：国家政策(Chinese Policy for Ethnic Groups) 民族間関係(Ethnic Relationships) 漢族(Han Chinese) 六甲人(Liujiaren) 壮族(Zhuang) 侗族(Dong)

1. 三江侗族自治権の概要
2. 諸民族の概要
3. 斗江郷の概要

序文

現在見ることのできる諸民族の文化は多かれ少なかれ歴史上、国家政策の影響や民族集団間の接触を経て形成されてきた。広西において、国家政策としては、民国期の「改良風俗」政策や解放後の民族自治地方の建設・民族識別工作をふくむ民族政策が、民族間の接触としては非漢族である壮(チワン)・侗(トン)・瑤(ヤオ)・苗(ミャオ)族と後来の漢族移民(「平話人」「広東人」「客家」など)との関係がすぐに思い浮かぶ。本稿では、多民族共住地域として知られる広西北部、三江侗族自治県の斗江郷を舞台として、国家政策や民族間の関係が民族とその文化の形成にどのような影響を及ぼしたのかを検討することとしたい。その場合、三江県に居住する諸民族のうち漢族・壮族・侗族の3民族を検討の対象とする。

三江県は「侗族自治県」で広西の侗族のうち63%もが居住する。それゆえ従来、侗族の集中する地域である県の西部・北部が目され、諸民族が共住する東部の斗江郷は全くといってよいほど脚光を浴びなかった。しかし、斗江郷では壮族・侗族や漢族との間に複雑

な民族間関係が見られ、本稿の主題に対して重要な材料を提供する。本稿では斗江郷を中心に、隣接する高基郷にも目配りしながら検討を行ないたい。

なお、筆者は従来、長期的なタイム・スパンを設定して広西の広域に及ぶ範囲を歴史民族学的方法によって歴史文献と調査資料とを併用しながら検討してきた。しかし、本稿は一つの郷という狭い地域の事例について調査資料に重点を置いて検討するものであり、いわば調査報告的なものであること、かつ今後のより掘り下げた研究につなげるための予備的な報告であることを予め断っておきたい。

## 1. 三江侗族自治県の概要

三江侗族自治县は人口約 32.19 万人を擁し（1991 年）、うち侗族が 17.17 万人（全県人口の 53.3%）と過半数を占める。ほかに漢族 6 万人（18.6%）、苗族 5.15 万人（15.9%）、壮族 2.15 万人（6.6%）、瑶族 1 万人（3.1%）と続く（1990 年）。おおよその分布の傾向として侗族は県の西部・北部に、漢族は中部・南部に、壮族は東部・東南部に集居し、苗族・瑶族は各地の高山に分散している（表 1・民族分布地図を参照）。同県には県治が置かれている古宜鎮のほか 15 の郷がある。表 1 によると、16 郷鎮のうち、斗江郷において侗族・漢族・壮族の 3 民族の人口が互いに接近していることが指摘される。なお、同郷では県内で壮族の人口が最も多い。

県としては宋代以来の歴史を持つが、解放後の 1952 年 12 月 2 日、「三江侗族自治区（県級自治区）」となり、1955 年、自治県になった。「三江侗族自治区」の成立が、現在の広西壮族自治区（の西半部）の前身である「桂西僮族自治区」の成立（1952 年 12 月 9 日）とほぼ同時期であることが注目される。

## 2. 諸民族の概要

先述のように三江県には主要な民族として 5 つの民族が居住するが、それらのうち本稿で検討の対象となる 3 つの民族について概観しておこう。

---

1) 調査は 1990 年 5 月、1997 年 8 月に行なわれた。

## (1) 漢族

同県に居住する漢族の支系には「六甲人」「麻介人（客家）」「広東人」「水上生活民」およびそれら以外の「普通漢人」がいる。

県内の諸民族の来住の時期として、苗族・瑶族が最も早く、ついで侗族、さらに壮族・六甲人が明代頃に來住したとされる。湖南・江西・貴州など各地の出身者を含む「普通漢人」はその後である。広東人・客家は最も遅く來住したが、その時期は明末～清代の頃と考えられる（三江県民委編 1989）。

漢族諸集団のうち壮族と接触することが多かったのが六甲人である。六甲人は沿河の平地に居住する。現在の人口は推定約3万人で、県の漢族の半数を占める。古宜鎮を中心に四方10キロメートル内の地域、とりわけ尋江沿岸の平地を中心として大小47の村寨に居住する。「六甲人」とは後來漢人からの他称で、自称は「客人」あるいは「客」である。明清時代の行政単位「三峒六甲」にちなんで、そこに居住する人が「六甲人」と称せられたという（三江県民委編 1989：85）。民国『三江県志』二、民族、各述「六甲人」によると、北宋の大觀元年、金の侵入の際に福建の漢民の曹・榮・龍・李・潘・楊・欧・馬・藍・侯・龔・謝の12姓が連合して難を避けて福建省汀州府を離れ、広東、柳州を経て、古宜に至ったという<sup>2)</sup>。しかし來歴に関する傳承は一樣でなく、上記の12姓以外にも「六甲人」（と称する集団）がいる<sup>3)</sup>。このことから、それが早期に來住した來歴の異なる漢人系諸集団を含むことが窺われる。その言語は漢語の系統である「平話」に属し、ながく三江に居住して独自の發展を遂げたため故地福建では通じないといわれる<sup>4)</sup>。

費孝通によると、六甲人は、少数民族地区に移住した漢人のうち早期移民が長期間内地と隔絶し、後來漢人と言語・風俗習慣において一定の区別があり、なおかつ後來漢人から差別を受けたため、自ら当地の漢人と差異があることを認めており、解放後、少数民族と

---

<sup>2)</sup> （三江県民委編 1989：85）（黄・施編 1995：242-243）によると故地は福建汀州府上杭県だという。

<sup>3)</sup> 後述する斗江郷斗江村の梁姓はその一例である。なお、來歴について（三江県民委編 1989：85）では、福建の故地を離れる契機について、金の侵入のほか、黄巢の乱によるという傳承もあることが指摘されている。

<sup>4)</sup> その言語は民国県志によると、融県の「百姓話」及び粵語と類似する。（三江県民委編 1989：88）によると、融安県の百姓話あるいは「土拐話」に近似しているうえ、客家語の特徴、閩南語や粵語の「痕跡」も見られるという。すなわちふるい広西の漢語に加えて、（接触によって）広東語・客家語・閩南語の要素も部分的に加わったものと思われる。

承認されることを要求した(費 1980)<sup>5)</sup>。後来漢人から蔑視され「六甲佬」「六甲仔」「大爺佬」と呼ばれた(黄・施編 1995:243)が、その理由は(後述するように)習俗において非漢族の影響を受けたことにあるようである。

諸民族の習俗における特徴については民国『三江県志』・(三江県民委編 1989)の記事を引用しつつ表2に整理した。おおよその傾向として、六甲人と非漢族とが相互に影響を及ぼしあったこと、そのなかでも非漢族の「漢化」の傾向が強かったこと、より具体的に言うと六甲人が壮族・侗族、とくに侗族の影響を部分的に受容したが、それよりは壮族が六甲人の影響を受けたこと、そしてその程度は侗族の場合よりも強いことが窺われる。民国『三江県志』に「按六甲漢人也。中屈於夷、復歸於夏、其風俗當自易齊一於漢俗」とあって、六甲人は元来漢人であったが、のち非漢族の影響を受けた。さらにのちに漢に「復歸」したという。そうとすれば非漢族化した漢人が「再漢化」した事例として考えられる。また、六甲人は民国『三江県志』に、元・明代には「民」と称しており「夷」と区別されていたとあり、元来「夷ではなかった」とする記事が見られる。それは他者から「夷」と見なされがちな状況における一種の自己主張である<sup>6)</sup>。

ともあれ、以上より、各地からの早期移民が三江で集結し、六甲語を中核とし非漢族の影響をも受けつつ、後来漢人から蔑視されるなかで「六甲人」「六甲族」意識が形成されたであろうこと、しかし民国期には漢族であるとの主張もなされるようになったことが指摘されよう。

なお、「麻介人」(客家)は、(三江民委編 1989:86)によると、明末清初に広東嘉応州あるいは福建・江西等の地から来た。民国『三江県志』二「社会」によると、広東嘉応州出身者が多い。明末に嘉応州あるいは福建・江西等地から来て各市鎮に散居していること、商業活動に秀で、至る所で致富してきたこと、住居・衣服等の習俗については一般漢人と同じであることが述べられている。

---

<sup>5)</sup> それは貴州の「穿青人」と同様のケースだとされるが、六甲人の場合、解放後少数民族となることを要求したが、「民族意識が強くない」、漢族と認定された(黄・施編 1995:243)点で、今日なおも未差別の状態にある「穿青人」とは異なる。

<sup>6)</sup> 当時の漢族中心主義的な思潮もその意識の形成に関係があるであろう。当時、この思潮のなかで漢族・非漢族同源説が唱えられた。たとえば瑶族・侗族と漢族の同源説については(劉 1934)がある。

## (2) 壮族

壮族は、民国『三江県志』「僮人」によると、その先人が苗族・瑶族より遅れて三江に來住した。(三江民委編 1989:120-123)によると、「数百年前」(宋～明代)に南丹・慶遠から來住した<sup>7)</sup>。同県志によると平地に分布し、姓には韋・覃姓が多い。かつては僮話を話していたのが民国期には人口の半数以上もが漢語(官話)を解し、男子には「読書し識字する者が多く」、「文化風俗が漢人とほとんど一致に趨く」として既に相当に漢化した。表2を見ると、その習俗が多く漢化を遂げたことがわかる。なお、当時(1947年)は現在の壮族のうち広西北部の数県に居住するものが「特種部族」とされ同化の対象とされた<sup>8)</sup>。自称は「イエイ」(ないし「ブー・イエイ」)。

## (3) 侗族

その來歴は、貴州の榕江・黎平・天柱一帯、湖南靖州・通道、広東南海県、広東三水県、広西慶遠府、広西平樂からなど、さまざまな移住伝承がある。移住の契機は戦乱を避けて避難したなど、これも多様である。なお貴州等の地は通過地であって、祖籍は江西吉安府泰和県だとも言われる<sup>9)</sup>。分布地は広いが、地図を見ると、古宜を中心としてほぼ六甲人の外側に分布する。習俗は表2の如く、壮族の場合と比較すると独自性がより強い。自称は「ガム」。

## 3. 斗江郷の事例

### (1) 斗江郷の概要

斗江郷は古宜鎮(県治)から東方へ12kmのところ、龍勝各族自治县との県境地帯にあ

---

<sup>7)</sup> この移住伝承は広西北部の他県にもあり、明清時代の文献で傍証することが可能である(塚田1985)。(三江民委編 1989:123)によると、その言語は宜山一帯の壮語方言に近いことが指摘されており、移住は歴史的事実であろうと思われる。

<sup>8)</sup> もっとも当時「特種部族」とされたのは今日の壮族に相当する人々の全てではなく、三江・龍勝・融県・羅城などの広西北部の統治権力の勢力が十分に浸透していない県に居住するいわゆる「生僮」に限られた(劉 1939)。もっとも当時「特種部族」とされたのは今日の壮族に相当する人々の全てではなく、三江・龍勝・融県・羅城などの広西北部の統治権力の勢力が十分に浸透していない県に居住するいわゆる「生僮」に限られた(劉 1939)。

<sup>9)</sup> この点について、明代貴州に派遣された屯軍のうち江西吉安府出身者が多かったとされている(三江民委編 1989)。なお、侗族の江西來住伝承は屯軍から伝播した可能性が想定される。

る。全郷の人口は約 21000 人（1996 年）で、10 の行政村がある。複数の民族集団が混住するところで、漢族（六甲人、客家、普通漢人）・侗族・壮族が居住する。人口は表 1 の如く、侗族 7200 人、壮族 7700 人、漢族 5450 人、瑶族（盤瑶）1000 人（1990 年）である。先述のように県内の他の郷鎮に比べて侗族・壮族・漢族の人口は拮抗している。複数の民族集団が混住するといっても、おおよその傾向として尋江沿岸～南方山地にかけて、ほぼ六甲人、侗族、壮族の順、すなわち六甲人は郷政府周辺の低地農村に、侗族はやや内陸よりの沿河地帯に、壮族はさらに奥地の山腹に居住する。もちろん局地的には実際には集落が隣接していたり同一集落に共住することも少なくなく、「大雑居、小集居」の表現が当てはまる。3 民族は、前表 2 から窺われるように、服装からは区別することができない。また習俗も斗江では大きな相違が見られない。習俗の上からはむしろ 3 民族間の共通点が多い。侗族は県北では楽器「蘆笙」や舞踊「月也」、建築物「風雨橋」「鼓楼」などの特徴が見られるが、それらは斗江の侗族のもとには全く見られない。ただ干闌（高床）式住居に住み言語が他民族と異なるだけである。

## （2）斗江村斗江寨——六甲人集居地

斗江郷政府所在地の斗江村および周辺の農村には六甲人が多い。うち梁姓の移住伝承は次のものである。すなわち、宋代に山東の梁山県を離れた。5 代目に王安石の変法に連座し湖南省会同県・靖県に流された。明代嘉靖年間、梁国基のときに広西の宜山へ「征蛮」軍を率いて来た。国基は戦死したが、後にその子孫梁采富が古宜鎮灘頭に来住し、以降三江に住み着くようになった、と。山東を故地とし、南征を契機とする広西への移住、そして宜山から三江に来住したという点では壮族の移住伝承に近いものがある。

ともあれ、六甲人は清代から民国にかけて政治的・経済的に当地で優勢となり、その結果、条件のよい平地の耕地を押さえ壮族や侗族より優位に立った。当時、六甲人は他民族の女性を娶るのを嫌ったという。また、他者から侗族と見なされるのを嫌ったという。六甲人は三江県、ことに県治の古宜鎮では過去に後來漢族から差別されたが農村部の斗江では六甲人としての身分を隠さなかったと言われており、斗江では身分を偽る必要がないほど他集団よりも優位にあったことが窺われる。このことは、当地における壮族や侗族の「漢化」が実は「六甲化」の側面が強かったであろうことを予測させる。

## （3）牙林村牙林屯——壮族の「侗化」

牙林村は人口 2181 人（1996 年）、侗族が主体である。それらは以前は壮族と申告していたが、1982 年以降、侗族と申告したものである。1982 年の頃は、文化大革命終了後、民族識別が「回復」しはじめた時期に当たっている。祖先は慶遠宜山から移住した壮族で、来住後約 300 年経過したらしい。のちに侗族女性が壮族に嫁ぐことが多くなって、その結果侗語を話すようになったと言われる。現在 60 歳の老人が子供のころすでに祖父が侗語を話していたといわれる。そのことが事実なら、壮族（の先人）が通婚を契機として歴史的に「侗化」した事例である。解放前には「民族」の概念は一般の人々の間にはなく、言語が自他を区別する基準であった。壮族の場合、当時都市に住む知識人の間には差別されることを嫌って自分が壮族であることを隠す（従って壮語使用が避けられた）傾向にあったようであるが、農村では壮語が避けられることはなかった。牙林の場合は正確には「壮語を話す人々（<sup>ガンイエイ</sup>講壯）」が「侗語を話す人々（<sup>ガンガム</sup>講侗）」に変化したということであろう<sup>10)</sup>。とくに同村の牙林屯には、梁姓の侗族が多くを占める（約 400 人）が、彼ら自身の言説によると「壮が侗に変わった」のだという。侗族自治県成立後もながらく壮族と申告していたのは、一つには当地の農村での勢力関係において壮族が侗族よりも優位にあったからであろうと思われる<sup>11)</sup>。当地の侗語は三江県の他地域の侗語とは（通じるものの）声調が異なるという。また、先述のように言語以外に侗族としての文化的特徴がなく、習俗は六甲人に近似しており、対歌も六甲歌を用いる。日常の共通言語として六甲語が通用する。壮語は通用するとは限らない。

このような、もと壮族の村でのちに「侗化」したケースは必ずしも多くないが、周囲には沙宜村など同様の事例があつて、必ずしも特殊なケースなのではない。小龍生村は人口の半数が六甲人、残りの半数が侗化した壮族だといわれる。東坪村はさらに複雑で、もと壮族の村だったがのちに「壮族・侗族・六甲人」の 3 族雑居村になったといわれる。

#### （4）扶平村古生屯——六甲人の「壮化」

斗江から 5 k m 南下すると扶平村に着く。ここから西方に数 k m 山道を進むと古生屯に

<sup>10)</sup> ただし煩を避けるため本稿においては解放前の時期についても「侗族」「壮族」という表記をする。

<sup>11)</sup> また、農村では自治県の主体民族に変更することによって生じるメリットが人々の間に十分知られていなかったことも関係があるであろう。なお、1985 年当時、全県の行政幹部としては総計 4839 人（小中学校教師をも含む）のうち侗族が 2270 人（47%）にも達しており、ついで漢族 1745 人、苗族 388 人、瑤族 99 人、壮族 472 人の順となっており（三江県民委編 1989：26-27）、主体民族の侗族が多く採用されている。これより行政上の優遇措置から都市部における侗族への変更が当然想定される。

着く。扶平村（人口 2547 人、1996 年）には、壮族、六甲人、侗族の 3 族が共住するが、侗族は少数で侗語は通用しない。古生屯は人口約 1200 人で、上・下寨に分かれる。上寨には、麻介人・侗族・六甲人が、下寨には壮族が居住する（推定人口は約 600 人）。下寨の壮族は実際には六甲人である。だが、彼らは集団的に 1952 年の桂西僮族自治区成立以来、僮（壮）族と申告してきた。民族成分の変更の際に根拠となったのは、彼らの族譜に記されていた祖先の移住伝承（南丹慶遠から移住したという伝承）である。壮族とはいえ、彼らは実際には壮語を話すことはできない。1984～85 年以前は、決め手となるような移住史さえわかれば民族成分の集団的な変更が可能だったと現地ではいわれている（のち自治区の方針で大量に変更させなくなったという）。しかも 1952 年の頃は広西の各地で政府の宣伝員が壮族を大量に「発見」した時期である<sup>12)</sup>。これにより、桂西僮族自治区の成立という国家政策が民族の生成にいかに関与したかが明白である。なお、彼らの移住伝承では、南丹・慶遠に住む以前には広東の「珠知巷」に住んでいたという。これによると移住経路は福建→広東→南丹・慶遠→三江となる。方向としては、柳州から一旦西へ向かい南丹・慶遠へ達し、そこから再度柳州方面に戻り、さらに北へ向かい三江に達したことになる。移住の可能性を排除するものではないが、しかし経路としては一見して不自然である。「南丹・慶遠」からの移住伝承は（真の）壮族と接触して壮族から取り入れたのであって、実際の移住経路にはなかったのではあるまいか<sup>13)</sup>。

その住居は木造高床式住居で、かつて 4,50 年前に土間式平屋住居から変わったという。この言説は古宜郊外の六甲人の集居地大竹寨にもある。住居様式の変化について、民国『三江県志』風俗「居処」に「六甲人の住宅は地面に就いて建造されている」ことが指摘されているが、（三江県民委編 1989：91）では県内の六甲人の住居の多くが木造高床式であることが指摘されており、明らかにこの間に変化したことが窺われる。この変化の理由として、侗族の影響を受けたという言説もある。しかし、その見方には六甲人が非漢族の文化的影響を受けたのは来住当初の頃のふるい時期においてであろうと思われる点で疑問が残

---

<sup>12)</sup> 例は枚挙に暇がないほどだが、たとえば『広西日報』1952 年 11 月 8 日、同 1952 年 12 月 10 日の「読者来信」など。

<sup>13)</sup> さらに言えば広東からの移住伝承も歴史的事実であるかどうか疑われる。というのは、広東の「珠璣巷」移住伝承（「珠璣」と「珠知」とは音が近く、同じ地点であろうと思われる）は、広東本地人のもとに見られるが、本地人と他集団との接触の結果、広西の茶山ヤオ族にも伝播したこと（牧野 1985：54-83）、賀県南郷の壮族に伝播したこと（瀬川 1996：240）が指摘されているからである。

る。あるいは、「六甲族」としての主張をする時に後来漢族と区別するために、なんらかの「標識」が必要であったのかもしれない。

#### (5) 白言村——壮族と「侗化した、もと壮族」との共住

扶平村からさらに7 kmほど丘陵地帯を上りつつ南下したところに白言村がある。人口2340人(1996年)。その内訳は、侗族1000人、壮族1200人、漢族100人、ほか瑶族若干で、漢族は(解放後に)嫁入してきた女性だという。村政府の置かれている白言街では侗族526人、壮族547人と侗族と壮族の人口がほぼ拮抗している。侗族には覃姓・楊姓が、壮族には覃姓(245人)・余姓(302人)・樊姓(若干人)がいる。居住地は市街地の中央を流れる小川を境界として東が侗族、西が壮族と分かれる。壮族が先に来住し、侗族は後来だという(後来といっても来住後すでに十数代経過している)。侗族のうち覃姓には、「南丹慶遠府」から来たという伝承がある。もとは、80~90歳の老人から見て5、6代前には壮語を話していたが、のち侗語を話すようになったという。老人たちには上輩者が壮語を話していたという記憶はなく、すでに相当早くから侗語に変化していたらしい<sup>14)</sup>。解放後1953年頃は壮族と申告していたが、のち「工作隊長」(県政府の民族工作部門の者?)の話聞いて侗族に変更したという<sup>15)</sup>。なお、侗族のうち楊姓(若干人)は、実は湖南湘潭から来住した漢人で、はじめ漢族と申告していたが、最近侗族と申告するようになったもので、したがって侗語を解さない。

覃姓侗族の来住初期は壮族の佃農となった。のち民国期には侗族も田地を所有しはじめた。そして遂には経済力で壮族を凌ぐに至ったという。解放前、侗族の地主覃輝煌は160余畝の耕地を所有し、茶油・桐油加工工場を経営していたという<sup>16)</sup>。ただし政治的な勢力としては壮族が上位にあり、村長などの役職は壮族が多かったという。両者の歴史的な勢力関係について、壮族は侗語をさほど解さないという事実にもその一端が現れている。

壮族には余姓・覃姓・樊姓がいるが、それらは来歴を異にする。来住の時期は余姓が早い。余姓壮族は自ら「もと麻介人だった」と主張している。ただし、以前は(始遷祖から

---

<sup>14)</sup> もとは譚姓だったという。このように移住の過程で譚→覃、韓→韋に変化した伝承は実は壮族のほうに多く見られる。

<sup>15)</sup> 人々によると当時は「民族」なるものを知らず、仲間のうちある者が壮族と申告したので、皆がそれに従ったという。

<sup>16)</sup> 覃は160畝の耕地しか所有していなかったがそれでも解放前の斗江では最大の地主だったという。この点から、広西の東部平野地帯と比較すると経済的条件が大きく異なっていた。

数えて第7代までは)麻介語を話すことができたが、後に話せなくなったという。故地は、福建の「江州」で、「游寇」にあい避難し、移住の途につき、桂林府西郷、融県を経て当地へ来たという<sup>17)</sup>。かつて土地を多く所有し勢力があったが、「文化のある人」(読書人)が出現せず、また後来の侗族が土地を所有し台頭するようになり、壮族はジリ貧となっていた。1953年に壮族と申告したが、その根拠は壮語を話していたからだという。覃姓壮族は南丹慶遠府が故地である。樊姓壮族はやはり南丹慶遠府を故地とするが、古生屯に移住しそこに長期間居住した後、2、3代前に白言に来た<sup>18)</sup>。漢語を話すので以前は漢族と申告していたが1970年代に壮族に変更した。

言語以外の習俗の面での相違は、余姓壮族が年中行事として5月15日(祖先が当地に来た記念日)・10月1日(祖先が福建を離れた記念日)を行うこと、覃姓壮族の家内の祭壇に壮族の祖先神「莫一大王」の名が書かれていることくらいで、他の面では2姓の壮族と侗族は区別することができない。

解放前、壮族側、侗族側それぞれに「寨老」がおり、それぞれのもめごとの処理を行っていたが、必ずしも「民族」(厳密には同じ言語を話す者の範囲)を単位として人々が結びついていたわけではない。両族間に通婚が行われたし、他村との境界をめぐる紛争が発生した時には村が単位となった<sup>19)</sup>。場面や事柄の相異によって人々が結びつく範囲は異なっていたのであって、「民族」は選択肢の一つに過ぎなかったのである。また、1930年代以降、新しい地方行政組織が施行されたが、村長は民族の如何に関わらず政府によって決められた。

なお、侗族や壮族は唱歌を好む。明末頃の文献『粵西叢載』所引「懷遠志」に、「民・獠・侗・獞にそれぞれの歌があって、その声はそれぞれ異なる」とあって、それぞれの言語・旋律の歌があったようであるが、しかし民国県志によるとすでに民国期には壮歌は廃れて

---

<sup>17)</sup> 付近の麻介人居住地は扶平村古生屯上寨のみである。余姓の移住の年代が早期であることから、その移住伝承は付近の麻介人の影響を受けたか、あるいは麻介人の影響を受けた六甲人から取り入れた可能性の両方が考えられる。なお、「江州」は恐らくは他者から地名が伝播する過程において「汀州」から変化したように想像される。

<sup>18)</sup> ただし36歳(1997年)のインフォーマントによる情報なので、来住時期はそれほど古くはない。

<sup>19)</sup> 1940年頃、龍生郷(現・斗江郷)・高基郷にそれぞれ属する2つの村の間に境界をめぐる争いが発生した。それは長期に及び県政府の調停によって解決されたが、この時に高基郷の村の側から代表として覃姓壮族が、龍生郷の村の側からは代表として東坪村侗族・扶奇村壮族・平廟村六甲人の3人が出廷したという。

六甲歌を歌うように変化した。白言村でも、かつて六甲歌が歌われた。しかしその六甲歌も解放後の政治状況のなかで廃れていったという。

#### (6) 高基郷桐葉村——壮族集居地

扶平からの分岐道を川沿いに向かい山地に入ったところに高基郷がある。当地は壮族の比率が高い。表1によると壮族が全人口の47%の3396人、ついで瑤族(盤瑤、1860人)、漢族(六甲人、1668人、以上1990年)となる。桐葉村は村民962人中802人が壮族で、残りは漢族(六甲人)87人、侗族71人である。覃姓壮族の族譜(新修)の列伝に併記されている者の配偶者のうち出身村が判明する者を見ると、壮族の多い村からの嫁入者が40余人、六甲人の多い村からの嫁入者が20余人、侗族の多い村からの嫁入者が15人ほどである。解放後の事情の変化(通婚の進行)ということもあるし、清末に戦乱や疫病で村が全滅して住民が入れ替わったような場合もあるので、おおよその傾向を把握することができるのみだが、壮族が人口の多くを占める村でも他村の他民族とも通婚していたことが少なくとも指摘されるであろう。

その族譜の「覃濟英(卓吾)」伝によると、濟英は辛亥革命～五四運動の頃「反帝反封建運動」に参加し、1948年には地元で地下組織「三江新民主主義協会」高基支部を作ったという<sup>20)</sup>。その間、「旧習俗」の「改良」を進めた。「旧習俗」とはこの場合、結婚後の3年間に及ぶ「不落夫家」、嫁入りに際して新婦側から多くの女性が随行してくること、彼女たちの簪を挿してスカートを着用する服飾である(後二者はともに盛大な嫁入りを簡素にする意図から出た改革である)。改革は1930年代、新桂系軍閥の支配権の確立とともに遂行された「改良風俗」政策のことで、民国『三江県志』に「獮人になおこの習あり、ただすでに制限あり」と述べられているように、桂北の三江・龍勝県でとくに成果を挙げたと思われる<sup>21)</sup>。これらにより、民族文化が変化(この場合、壮族の漢化)していく際に政策(こ

20) 『三江県志』三、政治「地方自治制度」によると覃濟英は1939-41年には県の第1期参議員に選任されたという。

21) 『三江県志』二、社会「改良風俗述略」に、1933年2月1日に公布され7月19日に一部修正された「広西省改良風俗規則」の条文の一部、1942年6月24日の「三江県改良風俗実施弁法」が掲載されている。「節儉を崇尚」して改良風俗を行うことが主旨であること、婚礼の際の礼物や酒食の金額の制限、葬儀の際の冥衣その他の金額の制限と僧尼・道巫師の雇用の禁止、醮祭・「淫祠」の禁、巫覡の禁、結婚年齢の違反(早婚)の禁、「不落夫家」の禁、髪の高さと形状の制限やイヤリングのための穿耳の禁など多方面に及んでいる。

の場合、民国期の「改良風俗」政策)の果たした作用も軽視することができないことが指摘される。

なお、その習俗として、先述の族譜によると女性の服飾、とくに格子模様のターバンを巻くが、それは「六甲漢人に倣った」という。また、「六甲歌」を歌うが次第に廃れてきていることが記されている。これらにより、壮族集居地においても漢化＝六甲化現象が見られたことが指摘される。先の覃濟英の改革において女性の服装が対象とされたが、それはあくまで婚礼時の盛装であって、平常の服装はすでに漢化していたであろうと考えられる。

## 小結

以下に本稿で検討したところを整理する。三江侗族自治州東部の斗江郷から高基郷にかけて、すなわち尋江沿岸低地から南部山地にかけて、ほぼ六甲人、侗族、壮族の順に居住するという棲み分け的な居住形態が見られながらも、それぞれの境界地域を中心に複数の民族が共住するという傾向が見られた。そこでは、壮族が侗族に変化したり、六甲人が壮族に変化するなど、ある民族集団が別の民族に変化するような場合が見られた。もっとも民族集団というよりは、厳密には特定の言語を話す集団が単位である。そして変化の契機としては、通婚による変化、桂西僮族自治区成立期や1980年代前半期(すなわち文革終了後の民族識別「回復」期)における集団的な変更、が挙げられる。

このような多民族共住地では、民族間の接触によって民族文化が変化した。ここではとくに壮族・侗族の漢化(六甲化)が主流だった。壮族集居地で不断に六甲人と密接に接触していない場合でも六甲化現象が見られた。民族文化の変化の要因として、民族間の接触のほかにも、民国期の「改良風俗」政策に代表されるような政策の作用も契機として軽視することができない。

もとより本稿の問題点は少なくない。民国期の「改良風俗」政策については氷山の一角のみを指摘したに過ぎないし、下位にある民族が高位にある民族に嫁入りして子孫がなぜ前者に変化するのか十分納得することのできる説明を行っていない。さらに、桂西僮族自治区の成立は民族成分の集団的な変更をもたらした重要な契機となる政治的大事件であるが三江侗族自治県の成立もまた住民にとって重大事であったはずである。が、なぜその頃の侗族への変更が農村では少ないのかが掘り下げて検討されていない。これらの問題点は今後の調査のなかで明らかにされねばならないであろう。

表 1. 三江県各郷鎮民族人口統計表 (1990 年) [陳・吳・吳・石主編 1992: 32] より。

郷鎮	総人口	侗族	漢族	苗族	瑤族	壮族	その他
古宜鎮	17178	5883	9324	732	204	971	
周坪郷	20820	2823	17612	129	36	223	
程村郷	8206	1315	6612	138	29	104	
丹洲郷	16143	3108	7643	953	1489	2931	
和平郷	7485	498	2087	89	523	4290	
老堡郷	15823	3321	7090	1744	2793	871	
斗江郷	21424	7200	5450	67	1006	7708	
高基郷	7159	226	1668	6	1860	3396	
良口郷	25449	18124	379	6485	440	21	
洋溪郷	16097	10529	551	4565	265	186	
富祿郷	21708	10601	962	9329	9	805	
梅林郷	10504	9526	591	363		26	
八江郷	30013	23951	348	5679	2	29	
林溪郷	26199	24937	207	1034	1	12	
独峒郷	36811	32652	17	4140		2	
同楽郷	35328	17086	176	16080	1968	18	
合計	316347	171786	60717	51533	10625	21586	123
占%	100	54.3	19.19	16.29	3.36	6.8	0.04

表2 諸民族の習俗の概要

	居住	飲食	服飾	婚姻	その他
六甲人	過去は平屋が多かった(県志二、社会「居処」で「地面に就いて建造し、多くは瓦葺きだが、矮小で暗い。庁堂の背後にイロリがある」と記されている)。1940年以降、とくに解放後に徐々に「木楼」に変化した。	ウルチ米を好む。ただし、糯米のモチを好む地方もあって、新年、社節、清明節、立夏、中元節につくる。油茶をつくる。「酸肉」「酸魚」を好む。	女性は黒色上着を着用し、格子模様のターバンを巻く。解放後ターバンの格子柄の幅が広がる。格子模様のターバンは壮族・斗江侗族に影響を与えた。ターバンのほか前掛け(結婚の時に着る。両側に光洋2個を付ける)、銀製腕輪(1930年代以降は玉石製に変化)をつける。	父母包辦婚、婚姻過程複雑、自由恋愛なし。かつて「不落夫家」婚あり。	姓ごとに大きな行事がある。王姓:5月5日を春節に次ぐ大節と見なす。侯姓は5月15日、榮姓は6月6日、唐姓・莫姓は7月14日と異なる。冬至に聚族して祭る者がある(県志によると、端午に「唱歌之会」がある。「僮人」も同じだが、六甲人は端午・上巳に行なう点で異なる)。「前人劉三姉之歌句」を唱うのを好む。「民主相公」信仰。
壮族		和平郷では油茶を作る。「酸」味を好む(漢族・侗族と大きな相異はない)	服装は多くは漢人と同じだが、女性の服飾に特徴が残る(円髻。袖・裾に刺繍を施した上着。幅広ズボン、刺繍付き前掛け、刺繍付き靴、銀製装身具)。(三江県民委編1989)では、「侗族の様式の“花衣”を好む」が「民国以来、多くは漢族の服装に変えた」という。	同姓婚。不落夫家。	県志によると、昔は頗る「慳悍」と称されるが今は概ね「性は素直で和平、……その他の辺民に比べて先進的であるようだ」という。さらに端午節に「唱歌之会」あり(僮人は清明・端午に行う。なお、男女が互いに山歌を歌うが、多くは家人が同伴し「冶游」しない。六甲人に冬至に聚族して祭る者があるが、僮人もまたこの時あるいは年末に行なう。莫一大王信仰。
侗族	干欄。建築物として鼓楼・風雨橋が著名。	糯米飯を好む。「酸」味を好む。「魚生」・油茶を作る。	女性の銀製装飾品に特徴があるが、歴史的に変化してきた。	恋愛自由。婚姻は基本的に当事者の自由。過去に姑舅婚盛行。不落夫家。	楽器「蘆笙」、舞蹈「月也」。行事としては「冬節」(侗年)を行う。姓ごとに月日の異なる行事がある(楊姓は11月に、吳姓は7,8月に行なう)。

## 参考文献

陳衣・吳善誠・吳功卿・石若屏主編

1992『八桂侗鄉風物』南寧：廣西民族出版社。

費孝通

1980「關於我國民族的識別問題」『中國社會科學』1980(1)。

黃光學主編・施聯朱副主編

1995『中國的民族識別』北京：民族出版社。

劉介（錫藩）

1934『嶺表紀蠻』上海：商務印書館。

1939『廣西特種教育』廣西省政府編譯委員會。

牧野巽

1985『牧野巽著作集5・中國の移住伝説、廣東原住民族考』東京：御茶の水書房。

瀨川昌久

1996『族譜——華南漢族の宗族・風水・移住——』東京：風響社。

三江縣民委編

1989『三江侗族自治縣民族誌』南寧：廣西人民出版社。

塚田誠之

1985「明代における壯族の移住と生態——明清時代壯族史研究(一)」『北大史學』25。

魏任重（修）・姜玉笙（纂）『三江縣志』民國35年鉛印本。

三江侗族自治县民族分布图

